

月例研究会（2019年4月13日）

史学史における日本政治史

——分化の検討と現在の課題

米山 忠寛

歴史学においては史学史の中で戦後歴史学の意義付けを問い直す試みが盛んになっているという。そこでは各分野を総合した全体史としての要素が弱まり、近年は経済史・政治史・社会史・文化史などの各分野に解体されているとの問題意識も示されているという。ただ政治史の側からは違う視点が出て来そうである。つまり戦後歴史学の桎梏からの「逃避の過程」や「軛（くびき）からの脱却の過程」としての分化・解体の変化である。

近年の歴史学の中では社会史・経済史の比重が高まっていったが、それに対して政治学は比重を下げた典型とされる。その中で政治史は政治学との関係を深めていくことになった。加えて日本政治史に関して重要になったのは丸山眞男の政治学との関係だろう。丸山やその門下生は本店と夜店といった形で日本政治思想史を越えて、大塚史学などと並んで社会科学の中で大きな影響力を持った。そこでは「理想化された近代」とのギャップがあり、理想とかけ離れた存在として近代日本はネガティブに評価されている。

マルクス主義歴史学などの発展段階論に飽き足らない場合でも、更に丸山政治学が存在するとなると、日本政治史を研究する場合には思想的発想からも距離を保つ理由を説明する必要が生まれることになった。謂わば二重の軛から脱する必要があったということである。

だとすると逃避のための正当化がまずは必要になった。日本政治史の展開が政党政治に多く

を依拠することになった背景には、民意という形で一応の正当化が可能であったことがあるだろう。ブルジョワ政党に過ぎないとして軽視されてきた政党を再評価できたことがその後の展開に繋がったと言えよう。「理想化された近代」とは異なる「現実の日本の近代」を評価できることになったのである。

ただそこに方法論的な自覚があったかという点、吟味してみると疑問も残る。とりわけ昭和戦前期戦時期との関係の中ではその点が表出されることになる。政党政治そのものを評価していたはずが、戦時期に関わると途端に基準がぶれるという叙述のされ方は方法論的な自覚の欠如を象徴するものと言える。政党内閣期には他の政治勢力を圧倒していた政党に関する説明が突然一変し、心ならずも軍部に盲従した集団となるか狂信的（ファナティック）となるか、いずれにしろ政党政治研究が満足に政党政治の変化の状況を説明できない惨状が発生したのである。

加えて近年の中堅世代による研究著作もこの閉塞感から無縁ではない。近年の一種の流行は二大政党制だが、政治学的要素との関連付けの意味合いがあるとはいえ、二大政党制それ自体に価値があるわけではない。むしろ20世紀の政治や政治学においては一大政党（共産党一党独裁や大政翼賛会の模索の一部）の分析に重要な意義があり、二大政党制では射程の短い議論にしかならないのである。これも逃避の過程が結果的に今日の研究にも余波を残している問題とも言えよう。

研究会における質疑応答では遠山茂樹の位置付けについての疑問や、社会史・経済史などの研究上の比率について、もしくは全体史が先に解体されたことで政治史が独自の世界を築けたのではないか、など様々な指摘があり、参加者からの活発な議論の応酬・応答が展開された。（よねやま・ただひろ 法政大学大原社会問題研究所客員研究員）